

未来の性

——ハーヴェル『ホムンクリーデンの帝国で』とヴァイニンガー『性と性格』の比較分析——

徳永 菜摘野

序

ウィーンの作家ルドルフ・ハーヴェル (1860-1923) は小市民の生活を描いた『母ゾルゲ—四幕からなるウィーンの民衆劇』(1900初演) でデビューしたが、その後次第に戯曲から散文へ創作の中心を移した⁽¹⁾。脳科学者の手術により人間の脳がロバの脳と交換される短編小説『ロバの脳』(1906) 並びに時間旅行と人工生殖が主題の小説『ホムンクリーデンの帝国で』(1910)⁽²⁾ はサイエンス・フィクション (SF) の先駆と見なされうる⁽³⁾。

『ホムンクリーデンの帝国で』には欧米の政治的運動に影響を与えたエドワード・ベラミーの『顧りみれば』(1888)⁽⁴⁾ の催眠術によるタイムスリップへの言及が見られる (vgl. 11-14)。ベラミーが動物磁気による眠りを時間移動の方法として考案したのに対し、ハーヴェルは体内の電流の操作による眠りを用いた。故に『ホムンクリーデンの帝国で』の先行研究では二つの小説の関連が言及される。シュミットは、ハーヴェルの小説をベラミーの小説に影響を受けたドイツ語圏

(1) Vgl. Sallaba, Karl Richard: Rudolf Hawel. Wien, Univ., Diss., 1931, S. 30-37, 113.

(2) Hawel, Rudolf: Im Reiche der Homunkuliden. Wien (Gerlach & Wiedling) 1948. 以下同書から引用する際は引用後に括弧付で頁数のみを示す。なお同書並びに邦訳未刊行の外国語文献からの日本語訳は筆者により、強調は原文に即す。本作の粗筋は拙稿「母性主義フェミニズムを超えて—現代フェミニズム小説の先駆としてのハーヴェル『ホムンクリーデンの帝国で』(Im Reiche der Homunkuliden) (1910)」「フラッシュエンボスト (Flaschenpost)」(ゲルマニスティネンの会)、第42号 (2021a) 1-5頁, 1頁参照。

(3) Vgl. Rottensteiner, Franz: Hawel, Rudolf. Im Reiche der Homunkuliden. In: Rottensteiner, Franz; Koseler, Michael (Hg.): Werkführer durch die utopisch-phantastische Literatur. Bd. 3. Meitingen (Corian) 29. Erg.-Lfg. Nov. 1999, S. 1-6.

(4) ゴットフリート・シュミットはこの小説が「ドイツ社会民主主義のメガホン」と見なされたと指摘する。Vgl. Schmidt, Gottfried: Sozialdemokratische Zukunftsbilder. Deutsche Science Fiction im 19. Jahrhundert in der Tradition von Edward Bellamys Roman „Looking Backward 2000-1887“. 1. Teil. In: Quarber Merkur. 43 (Mai 1976), S. 34-49; 2. Teil u. Schluß. In: Quarber Merkur. 44 (Juli 1976), S. 33-51, Mai 1976, S. 44. ハンス・フレイによると、ドイツでは社会民主党の新聞や出版物が『顧りみれば』を有名にし、社会主義者で女性運動家クララ・ツェトキンらによる数多くの翻訳が出た。Vgl. Frey, Hans: Fortschritt und Fiasko. Die ersten 100 Jahre der deutschen Science Fiction. Vom Vormärz bis zum Ende des Kaiserreichs 1810-1918. München; Berlin (Memoranda) 2018, S. 53.

のSF小説の一つと見なした⁽⁵⁾。同様にカールステン・クルッセルもハーヴェルの本作を「エドワード・ベラミーに対する応答としての初期サイエンス・フィクション小説」⁽⁶⁾と表現する。シュミットが「ハーヴェルの小説により〔中略〕ベラミーによって宣伝された催眠術的な眠りの形式における時間旅行はその頂点と終点に到達したと思われる」⁽⁷⁾と述べる様に、ハーヴェルの小説にはベラミーの小説と似通ったプロットや未来の社会主義国家の構想が見られる。ハーヴェルの小説における、社会主義的な統治形態の合理性や組織的な決定の優先を人工生殖技術によりさらに強化した全体主義的暗黒郷は、1930年代以前の左派と優生学との密接な関連を踏まえれば――例えば「民族衛生の為のドイツ協会」の中心的な創設者であったアルフレート・ブレッツは彼の著書『民族衛生学の基本方針』（1895）において、優生学と社会主義の理想を合体させようとした――ベラミーの社会主義的理想郷の批判或いは風刺という解釈を成り立たせるだろう。

しかしながら私見では、『ホムンクリーデンの帝国で』の暗黒郷社会は、ベラミーの理想郷小説に感化された未来小説という文脈や、その背景にある欧米の労働問題、貧富の格差、社会主義運動ではなく、世紀転換期のウィーン独特の性や文化に関する思想の中でこそ、その独自性をよりよく理解することができる。ハーヴェルの作品において暗黒郷の最大の要素は、女性がいらない人造人間の帝国である。この帝国は女性の不在による旧人間の滅亡、或いは科学技術的進歩の当初の方向性からの逸脱を意味する。女性が男性中心主義的な進歩の周縁に追いやられていた二十世紀初頭において、ハーヴェルの小説は女性の中に未来の人間性への希望を託した。それはリートの家庭によって十九世紀小市民家庭の性役割を基本的に踏襲したベラミーの理想郷⁽⁸⁾を批判するものでもあった。本稿では、ハーヴェルの同郷かつ同時代人である哲学者オットー・ヴァイニンガー（1880-1903）の差異心理学的主著でベストセラーとなった『性と性格』（1903）と、ハーヴェルの小説における性（ハーヴェルとヴァイニンガーのテキストではセックスとジェンダーの両方を意味するが、本稿では適宜ルビを振って両者を区別する）に関する記述とを比較してみたい。『性と性格』（元は彼の博士号請求論文）は、今日ではドイツ語圏で初めて人間の性を「明確にそして哲学的に」⁽⁹⁾扱った、「世紀転換期の女嫌いの時代精神」⁽¹⁰⁾と見なされている。二つのテ

(5) Vgl. Schmidt 1976, S. 51.

(6) Kruschel, Karsten: Hawel, Rudolf. In: Hagedstedt, Lutz (Hg.): Deutsches Literatur-Lexikon. Das 20. Jahrhundert. Biographisch-bibliographisches Handbuch. Bd. 15. Berlin; NY (Gruyter) 2010, S. 262 f., hier S. 262.

(7) Schmidt 1976, S. 51.

(8) Vgl. Schmidt, Mai 1976, S. 36.

(9) Stopczyk, Annegret: Beitrag. In: Weininger, Otto: Geschlecht und Charakter: Eine prinzipielle Untersuchung. Nachdr. der 1. Aufl. Wien (Braumüller) Mai 1903. München (Matthes & Seitz) 1980, S. 654 f., hier S. 654.

(10) Fähnders, Walter: Avantgarde und Moderne 1890-1933: Lehrbuch Germanistik. Stuttgart; Weimar (Metzler) 2010, 2., aktualisierte u. erweiterte Aufl., S. 110.

クストはフィクションと学術論文という異なったジャンルに属し、それ故異なる執筆目的、形式、読者を持つにも関わらず、十九世紀の生物学、特に細胞学と発生学を踏まえ、人間の発生を人間の性の始原との関連から問題とする点で類似している。さらにハーヴェルがヴァイニングアのこの著作を読んだという明確な証拠はないものの、この二人は従来の生物学的な人間の性のあり方を越えた、未来の新しい人間の性を構想したという点で共通性がある。ただしヴァイニングアがこの未来の性を理想の人間の性となしたのに対し、ハーヴェルは作中に登場するホムンクルスをいわば実験動物にしてこの未来の人間の性を批判したのであるが。

白人男性キリスト教徒文化防衛

『性と性格』の第13章は「ユダヤ的なもの」と題されている。だがこの章で問題となるのは人種、民族、宗教と結びついた一般的な意味でのユダヤ人ではなく、「精神的⁽¹¹⁾方向」や「心的⁽¹²⁾構造」としての「ユダヤ的なもの」である。それはユダヤ人的性格なるものであり、これが女性的性格といかに密接な関係にあるかが述べられる。彼の論の核心は『女性』と『ユダヤ人』の精神のなさ⁽¹³⁾であり、それはユダヤ人ヴァイニングア（彼は1902年にプロテスタントに改宗した）の自己憎悪の表れでもある。ただし同章ではユダヤ人的な性格だけでなく、中国人等蒙古人や黒人のそれも女性的性格と類似するとされる⁽¹⁴⁾。つまり彼にとって白人男性且つキリスト教徒的性格ではないものは全て女性的性格を持つ。しかし世紀転換期のウィーンにおいて経済的、文化的に強力な影響力を持ったのは西欧化したユダヤ人であり⁽¹⁵⁾、この状況をヴァイニングアは白人男性キリスト教徒文化の危機と見た。故に『性と性格』を世紀転換期のウィーンにおける文化闘争の観点から白人男性キリスト教徒文化の非白人男性キリスト教徒文化＝ユダヤ人文化に対する抵抗と見なすことができる。

『ホムンクリーデンの帝国で』においても白人男性キリスト教徒文化防衛の姿勢が見られる。しかしながらヴァイニングアがユダヤ人であったのに対しハーヴェルはユダヤ人ではない。彼の小説においてもヴァイニングアの言う「ユダヤ的なもの」が読み取れる箇所はなく、ましてや反ユダヤ主義やシオニズム等当時の一般的なユダヤ人問題に関する記述があるわけでもない。ではハーヴェルの小説において何が白人男性キリスト教徒文化と対立しこれを脅かすものとして描か

(11) Weininger 1980, S. 406.『性と性格』引用個所の日本語訳はヴァイニングア、オットー（1980）『性と性格』（竹内章訳）村松書館を参考に筆者による。

(12) Ebd.

(13) Dischner, Gisela: Freiheit auf dem Weg der Entsagung? Zu Otto Weiningers „Geschlecht und Charakter“. In: Weininger 1980, S. 656-661, hier S. 658.

(14) Vgl. Weininger 1980, S. 404 f.

(15) 村山雅人（1995）『反ユダヤ主義』講談社参照。

れているか。それはヴァイニングガーも述べた様にアジア人である。作中ではアジア軍がヨーロッパを征服し、アジア人が世界を支配するという未来史が語られる。アジア人の次に世界の覇者となる人造人間も日本人と中国人の科学者により開発されており、故に人造人間をアジアの、科学技術を含む広義の文化の一つと見なすことができる。日本文化とよく似たホムンクリーデン文化も⁽¹⁶⁾この点を裏づける。人造人間文化＝アジア文化がキリスト教文化の中で生まれ育った主人公フォラウス博士⁽¹⁷⁾とロレンツ・ウンターコフラーの眼には異質な文化と映り、彼らはそれに対する反感を募らせる。作中においてはアジア人の帝国も人造人間の帝国も共に精神や宗教（キリスト教）が破壊され文化的に頹廃している。それに対しアジア人帝国の支配に文化的に抵抗するヨーロッパ人や、人造人間の帝国の周縁にいる「ドイツ人、スカンディナヴィア人そしてイギリス人の生き残り」（165）は白人男性キリスト教徒文化の防衛者である。

まとめるとヴァイニングガーとハーヴェルは共に世紀転換期のウィーンにおける白人男性キリスト教徒文化と非白人男性キリスト教徒文化との間の闘争を各々のテキスト内で問題としている。しかし非白人男性キリスト教徒文化の代表者はヴァイニングガーの場合ユダヤ人であり、ハーヴェルの場合アジア人である。この相違は二人がユダヤ人の自己憎悪と黄禍論⁽¹⁸⁾という全く異なる考え、世界観を持っていたことに起因する。さらにヴァイニングガーの場合、白人男性キリスト教徒文化に敵対するものは全て女性に還元されるのに対し、ハーヴェルにおいてそれらは全て女性の不在に還元される。この違いは二人の白人男性キリスト教徒文化に関する考え方の違いによる。即ちヴァイニングガーは女性を脅威と考え、これを白人男性キリスト教徒文化から完全に排除する。これと類似する思考方法をとるのがハーヴェルの小説の人造人間である。この小説が描く未来では科学技術の進歩により自然生殖は人間の再生産の一手段にすぎなくなり、やがて自然生殖により誕生する従来の人間はほぼ絶滅し人工生殖により生まれる新人間、即ちホムンクリーデンが世界を支配する様になる。しかし完璧な人間であることを誇る人造人間も博士とロレンツからすれば完璧ではない。彼ら旧人間たちは人造人間やその社会の問題を以下の様に批判するが、その際

(16) 詳細は拙稿「速度と有能（用）性—ゲーテ悲劇『ファウスト』第二部とハーヴェルの小説『ホムンクリーデンの帝国で（*Im Reiche der Homunkuliden*）』（1910）におけるホムンクルス』『モルフォロギア—ゲーテと自然科学』（ゲーテ自然科学の集い）第43号（2021b）100-125頁、112頁参照。

(17) 学术界から非難される博士の人物描写には、例えばクルト・ラスヴィッツの『二つの惑星の上で』（1897）やオスカー・ホフマン『第四の次元—形而上学的空想小説』（1909）等初期ドイツ語圏のSFに共通する、言説を生産する職業的な専門家集団から疎外された、通俗科学の仲介者としての主人公像が現れる。

(18) 『ホムンクリーデンの帝国で』は単行本出版に先行して1907/08年に自由主義的なウィーンの日刊紙「ツァイト」に連載された。この新聞は日露戦争以降、黄禍論を度々取り上げたが、同紙ではこの言説は政治的、軍事的な国際論争や黄色人種排斥運動の端緒として真剣に扱われてはおらず、単なる好奇心の対象或いは冗談、嘲笑、物笑いの種、大衆的な文学や演劇のテーマであった。ハーヴェルも本作の中で真面目に黄禍論を主張しようとしたのではなく、読者受けを狙ったものと推測される。本小説と黄禍論に関してはまた別の機会に詳述する。

それらの問題の原因として主人公たちが指摘するのは常に女性の不在である。例を挙げよう。博士は「その心はどんな喜びも感じないこの国民は、頭と理性だけでその他には何も無い」(273)と激昂する。ロレンツはそれを肯定し、その主たる原因は人造人間の中に女性がいなかったと述べる (vgl. ebd.)。主人公たちは人造人間に知能と理性はあるが、人間らしい感情や良心が欠落していると度々口にする。さらにこの帝国には「本物の、創造力のある芸術家、詩人、画家、彫刻家、俳優」(284)はいない。人造人間はその原因を様々に推測するが、博士は人造人間に女性が欠けていることが正しい原因だと断言する (vgl. 285)。これに関連してロレンツは人造人間がなぜ詩情を持たないのか^{ゴエジー}が話題になった際、彼らに女性がいなかったと述べている (vgl. 263)。最後に新人間に対する諸批判を総括する博士の台詞を引用する。

あんた方は女性との関係がそれと共に齎す苦悩も激昂も、何の痛みも感じない。あんた方はしかしそこから生まれ、人間たちをかつて芸術の傑作へと導いた筆舌に尽くしがたい幸福も感じない。この関係は男性に永遠の戦いを強いたが、彼に最も美しい幸福を齎した。全ての時代と民族の文芸において、絵画と彫刻において女性の崇拝が表現されている。私はあんた方の芸術への関係を正しく理解できたと思う。あんた方は苦しむことがないが幸福になることもない人々だ。かつて我々の心を動かし、一人の女性への、家族への、故郷への、祖国への愛といったもの全ては、あんた方の心を動かすことはない。冷たく、落着き払った種族がこの地球に住み支配する様になって以来、かつて我々の胸中に生きていた幾千もの声は沈黙してしまった！ (286)

上記より明らかとなるのは、人造人間社会における女性の消滅がいかに多くのこの未来人の短所の原因に帰されているか、言い換えれば女性が幸福、良心、感情、芸術、創造性の源泉としていかに肯定的に評価されているかという点である⁽¹⁹⁾。ハーヴェルは白人男性キリスト教徒文化の基盤として女性が必要不可欠だと考えている。つまり彼において実際に文化的活動を営むのは男性なのだが、その男性の文化的創造力は女性なしには発揮されないのである。ただし白人男性キリスト教徒文化の支え手としての女性はどんな女性でも構わないというわけではない。というのも人造人間の帝国では確かに白人男性キリスト教徒文化を復活させる原動力として女性ホームクリーデンが構想されるが、この女性は最後まで創られることがないからである。この女性人造人間には生殖力がなく (vgl. 320)、さらに他の潜在的に男性的な人造人間同様アジア人的性格を備える可能性がある。故にこの女性はキリスト教を信仰する白人女性とは生物学的にも文化的にも

(19) 本作における女性の肯定は世紀転換期のオーストリア女性運動を踏まえるとより深く理解することができる。詳細は徳永2021a 参照。

異なる女性であると予想される。白人男性キリスト教徒文化を求めて北方の人間社会にやってきた博士とロレンツが見つけるのは白人女性キリスト教徒であって、この女性によって主人公たちが再び白人男性キリスト教徒文化を取り戻すのである。この様にヴァイニンガーとハーヴェルは共に人種的、宗教的、思想的な差別意識や先入観、偏見に捉われている。だが、ヴァイニンガーが非常に硬直した文化的二項対立の内に男女の性差を当てはめ、女性的なものからの超脱を説いたのに対し、ハーヴェルは二つの性を対立させないことで両性の共存や相互依存を考察するのである。

原形質に注目した男女の性の始原と人造人間の性

ヴァイニンガーの『性と性格』は原形質に関する自然科学的言説に影響を受け、存在論的哲学的機械論、即ち生命活動を物質的な構成要素の機械的相互作用とする見方に依拠しつつ男女の二元論を考察したテキストである。彼は同書で十九世紀の細胞学、発生学を参照しつつ、人間の性に関する理論を以下の様に展開した。彼は男女の性の始原に関し「人間でも植物でも動物でも、発生時の胎児や胚胎芽は男女、雌雄の区別を持たないという」⁽²⁰⁾「発生学により立証された事実」⁽²¹⁾から出発する。ヴァイニンガーは理想の男性のタイプと理想の女性のタイプとの間に「男女間の〈無数の段階〉」⁽²²⁾即ち「性の中間形態」⁽²³⁾があると主張する。彼によれば現実の男性或いは女性は皆この性の中間形態であるのだが、その理由を彼は両性の理想的な原形質である「男性原形質」と「女性原形質」に求める。ヴァイニンガーは性の中間形態が生じる要因として、個々の細胞（原形質）の性的特徴と、現在では性ホルモンとして知られる、生殖腺から分泌される物質の多様性を挙げる（ただし彼によれば内分泌が身体の性的性格づけに果たす役割は、あくまで補足的なものである⁽²⁴⁾）。要するに男性或いは女性の身体を構成する個々の細胞が理想の男女の原形質の様々な中間形態を取る為、細胞の統一体としての男女の身体もまた理想の男女のタイプの様々な中間形態となるのである。しかしながら、こうした性の中間形態ないし両性性を唱えることでヴァイニンガーは男性らしい女性、或いは女性らしい男性といった性的多様性や個人差を肯定しているのではない。むしろ彼は第一部で予め生物学的な性の中間形態を説明しておくことで、第二部で展開される理想的な男性とその対極に位置する女性との極端な二元論に対して出されるであろう多くの反論や例外への守りを固めるのである。

ヴァイニンガーは器官や細胞といった「あらゆる基礎部分は元来特定の方法と特定の程度で性

(20) Weininger 1980, S. 7.

(21) Ebd.

(22) Ebd., S. 9.

(23) Ebd.

(24) Vgl. ebd., S. 19.

的に性格づけられている」⁽²⁵⁾と指摘する。つまり彼によれば性的な特徴が人によって異なるのは、各細胞が最初から様々な性的性格を持つからであり、故に人間の性的性格は先天的なものである。しかしながら、『性と性格』における人間の性的性格づけのメカニズムはあくまで著者の仮説であり、科学的に証明されるまでには至らない。ハーヴェルの小説では原形質の組成や人間の発生が科学的に究明され細胞、ひいては人間を自由に制作する未来が描かれる。以前述べたことだが、人造人間製造（vgl. 302-305）の中心にある人工原形質生成は1830年代から十九世紀後半にかけての細胞の組成に注目した細胞研究並びに十九世紀末から二十世紀初頭の実験発生学における前成説的機械論を踏まえている⁽²⁶⁾。ハーヴェルは人間の始原である原形質に関する研究が進めば、いずれこの原形質を操作・制作可能になるだろうと予測した。性的特徴のない人間であるホムンクリーデンの製造の基盤は原形質の性的特徴を消すことであり、それは原形質の性的性格づけのメカニズムが究明された結果可能になったと考えられる。つまりヴァイニンガーとハーヴェルは共に原形質に生命科学発展の鍵が隠されていると見なすのである。

男性の不死への要求と男性時間旅行者

本節ではヴァイニンガーが『性と性格』で言及した男性の不死への要求が、『ホムンクリーデンの帝国』において男性主人公たちが催眠技術により二千年の眠りにつく動機となっている点を指摘する。本小説の時間旅行とは任意の期間の仮死状態であり、被験者はこの期間が終わると通常の生命活動を取り戻すことができる。この技術によって人間は「時間の支配者」(16) 即ち自然な寿命の克服者になる。なぜなら生の完全な中断によって時間旅行者は睡眠中に歳を取ることはないからである。

二千年間眠り続ける主人公たちの状態は、現存する人体冷凍保存術のそれに近い。この技術では死後、身体は腐敗する前に冷凍され、未来の科学がそれを蘇生する方法を見つけるまで保存される⁽²⁷⁾。米国の人体冷凍保存術を取材した記者オコネルは冷凍保存された人体を「慣習的な基準で死亡しているのではなく一言わば遺体ではなく一生きた状態と死んだ状態の間に保存され、時間そのものの外にある何らかの状態に落ち着いている人間」⁽²⁸⁾と表現するが、主人公たちもまさにそのような状態で時間の外部の存在者となる。しかし1907年を生きる他の登場人物たちにとって博士とロレンツの時間外への旅立ちには死に他ならない。主人公たちが時間旅行へと旅立つ場面は、国民的な有名人の埋葬と重ね合わせられている。睡眠を妨げられることを防止する為、

(25) Ebd, S. 21.

(26) 詳細は徳永2021b, 101-107頁参照。

(27) オコネル, マーク (2018) 『トランスヒューマニズム—人間強化の欲望から不死の夢まで』(松浦俊輔訳) 作品社, 33-56頁参照。

(28) 同, 43頁。

また長期間の睡眠中に身体が破壊されることを防ぐ為に建造された強固な、彫像や壁画といった装飾が施された壮麗な建物バビリオン（vgl. 106-109）は墳墓と見なすことができる。また彼らに別れの挨拶をする人々—その中には著名人や喪服を着たロレンツの元恋人も交じっている—は、貴人の埋葬の参列者そのものである。

ヴァイニングァーは『性と性格』の中で「男性の超感性的超経験的な存在は物質、空間、時間を超越している」⁽²⁹⁾のであり、さらに「彼は不死の要求と一つである」⁽³⁰⁾と述べている。ヴァイニングァーにおいて不死はキリスト教の文脈における死後の永遠の生を指している。他方、小説においては仮死状態後、即ち二千年後の未来において主人公たちが彼らの生を再び取り戻す。未来での博士とロレンツの目覚めは、キリスト教における死者の復活として解釈することができ、このことから二人の未来での生は、キリスト教の文脈では死後の生であると言える。つまり小説内の男性主人公たちは、ヴァイニングァーの言う男性の不死への要求を、博士の知性による世俗化された物質的、空間的、時間的超越、即ち催眠時間旅行により満たすのである。

『性と性格』において、「女性は個人的な永続への要求がない」⁽³¹⁾点が、女性の精神性のなさの根拠の一つとなっている。小説においても仮死状態での時間旅行は女性登場人物、即ちロレンツの恋人ヴェッティの眼には全く魅力的に映らない。彼女にとって眠っている間に二千年歳を取ることは恐怖であり（vgl. 74 f. 実際には眠りによる時間旅行中に身体が老化することはないのだが、ヴェッティがこの点を十分理解しているのかどうか文中から読み取ることはできない）、現在の生の幸福、即ち他の男性との結婚生活は未来の不確かな復活とは引き換えられない。ヴァイニングァーが「彼[男性 徳永]の非常に深い意志は完全な超時間的存在、絶対的価値を目標とする」⁽³²⁾と指摘する様に、本小説において生物学的な人間の超越を望み、それによって「科学の英雄」（126）ないし科学の進歩の犠牲者（vgl. 49, 58）として崇拜されるのはやはり男性登場人物なのである。しかし男性主人公たちが目覚めた未来の世界はキリスト教的な来世ではなく現世的ディストピア暗黒郷であり、男性が至高な精神へと高められるどころか後述する様に逆に貶められている。こうしてヴァイニングァーの言う男性の死後の生存への要求は本小説において男性主人公たちの時間旅行の動機付けになりこそすれ、ヴァイニングァーの理論に反して男性の精神性の根拠とはならない。

女性の消滅と人造人間の登場

次に本作における女性の消滅と人造人間の登場をヴァイニングァーが『性と性格』で取り上げる

(29) Weininger 1980, S. 380 f.

(30) Ebd., S. 381.

(31) Ebd.

(32) Ebd.

女性問題と関連付けて論じる。二千年の眠りから目覚めた主人公たちは、彼らを世話する為だけに製造された特別な三人のホムンクルスー互いを識別する為に番号しか持たないこの有機アンドロイドに博士はプラトン、アルキメデス、レッシングという名前を与える（vgl. 161 f.）一の説明により徐々に眠っていた間に生じた地球規模の社会の変化を知る。この社会変化はセックス・ジェンダーとの関連から以下の二点に要約される。第一に、この未来史では女性が消滅する。二十世紀初めの女性解放運動は女性の社会進出を促した。男性との同権を求める女性たちはあらゆる手段を講じて自ら出産を回避し、男性と同等の労働能力を手にした。これは産む性としての女性性^{セックス}の消滅であると言える。

ヴァイニングが扱う女性問題も女性性^{セックス}の存在論的問題であった。なぜなら彼は女性の禁欲を説くことで、単に性的なものでしかない女性の存在を否定するからである（ヴァイニングは男性の禁欲をも要求するが、それは男性性を否定するどころかそれを美化する）。故にこの問題の解決策とは彼によれば女性の消滅、つまり女性の非存在である。それに対して性や生殖の軛から解放された男性は、キリスト教の死後の生存に基づく不死の存在となるとされる。さらにこの女性問題の解決策は救済として男性から女性に、彼女の人間性を高める為に与えられる。彼が理想とする男性の「純潔」⁽³³⁾、つまり潔癖な身体への希求の裏には、性欲という彼から見れば人間の脆弱さの源である肉体から超えたいという矛盾した思いがある。これは脆い身体を理想的な人間への障害と見なし、この障害の克服＝人間以上になること、つまり脆弱で不快で不完全で有限な人間の生物学的身体からの解放を目指す人間を^{トランスヒューマニズム}超越する運動の主要な目的と一致する。身体からの超越という^{トランスヒューマニズム}超人間主義的な希求は、宗教と親和性がある。なぜならそうした希求はオコネルによれば、「歴史的には宗教の領域にあり、今ではますます肥沃な技術の領域にある」⁽³⁴⁾からである。宗教的信仰により性的身体からの超脱を目指したヴァイニングを^{トランスヒューマニスト}先駆の超人間主義者と見なすならば、科学技術により性を持たない人造人間は現代的な意味での^{トランスヒューマニスト}超人間主義者だと言える。

ヴァイニングの女性問題とその解決策は、小説で描かれる女性問題とその解決と類似している。というのも小説では、第一に女性の男性化即ち生殖力の放棄により生物学的な意味での女性性^{セックス}が消滅し、第二に少なくともホムンクルスの帝国内において女性を含む旧人間そのものが彼らの文明と共に滅亡することにより、女性が担っていた様々な社会的文化的性役割^{ジェンダー}—それらは女性の全ての「形態」(176)と表現される—も存在しなくなるからである。帝国では女性の消滅により実際にはまた男性もはや存在しないのだが、プラトンは女性の消滅のみを強調する。この偏った説明は後述する様に人造人間が潜在的に男性であることに由来すると推測される。

(33) Ebd., S. 456.

(34) オコネル 2018, 206頁.

小説の第二巻ではもはや存在しなくなり、故に直接登場人物の姿をとって描写されない女性、しかし女性ホムンクリーデンという形で存在する可能性のある女性が、まさにその不在によって自らの存在を強く主張する。本小説において最後まで製造されることのない女性人造人間は、ギリシア神話のピグマリオン以来、人造人間のモチーフに典型的な男性の空想や願望の産物、つまり男性の「人生を非常に快適な方法で美化することができる」(340) 女性(=機械)である。その証拠に潜在的に男性であるホムンクリーデンは、人工生殖により成り立つ彼らの社会システムを維持するため、この女性人造人間に生殖力を与えない。ヴァイニングとハーヴェルは女性を存在論的に扱いながら、その目的は正反対である。つまりヴァイニングは性欲としてのみ存在する女性を批判し、男性の精神性の高さを肯定するのに対し、ハーヴェルは性的なものである以上の女性の存在価値を強調し、後述する様に男性の精神性の負の側面を批判するのである。

時間旅行者たちが仮死状態にあった二千年間に生じた、性の観点から重要な二つ目の社会変革として有機アンドロイドの登場と台頭が挙げられる。プラトンは博士に、人類が抱えていた諸問題が彼らの社会において解決されたと主張する。彼によれば人類が抱えていた諸問題、即ち「破壊的な苦しみ[中略]悲惨、絶望、心配そして不安」(175)の原因は、男女関係の「性的な情熱」(279)にある。ホムンクリーデンは男性性、女性性を生まれつき持たないことにより男女関係の構築を未然に防ぎ、静かに苦しみなく生きるのである。ホムンクリーデンの生の平静は、第一巻におけるロレンツの失恋の悲痛と対比されることでより説得力を持つ。

二つの性の存在を人類の諸問題の根源とする見解は、ヴァイニングの前述の著書においても見いだされる。彼は女性問題を人間性の問題と同一視した上で、イエス・キリストの言葉を引きつつ、両性が存在する限りこの問題は解決されないとする。彼は女性性^{セックス}と生殖を否定することで人類の存続をも否定する。そして女性と男性から生じる第三のものの到来を予期するのである⁽³⁵⁾。この第三のものとはヴァイニングにおいて理想的な男性の自我を指すのだが、これと字面上対応するのが本小説のホムンクリーデンである。ところが次節で見る様にホムンクリーデンには様々な短所がある為、理想の男性と見なすことはできない。

人造人間に対する否定的な評価

本節では本小説における男性の否定的な評価に言及する。ホムンクリーデンには性がないとされているが、私見では以下の三点から彼らは潜在的に男性であると思われる。この三点により、本作では潜在的に男性であるホムンクリーデンに仮託して、男性の様々な欠点が描かれるのである。第一に、主人公たち、語り手或いはプラトンが特定の人造人間を指す時に用いる男性定冠詞 *der* や男性に対する敬称 (Herr 等)、男性人称代名詞 *er* や男性名詞 (Mentor, Freund 等) が、

(35) Vgl. Weininger 1980, S. 457.

基本的な構造において全て同じ様に製造されるホムンクリーデンの潜在的な男性性を暗示している（vgl. 270 u.a.）。小説では例えば「私たちは男性の召使しか用意できません！」（139）というプラトンの台詞に、ホムンクリーデンに性がないという設定と彼らの男性性との明確な矛盾が見られる。

ホムンクリーデンの潜在的な男性性は、ロレンツの女性ホムンクリーデン製造案を巡る議論の中で顕著になる。ホムンクリーデンの議会のみならず彼らの社会全体が、女性人造人間開発賛成派と反対派に二分され、両陣営は激しく対立する。プラトンはこの状況を以下の様に描写する。「帝国は巨大な興奮に捉えられてしまいました。」（341）通常感情のないホムンクリーデンの異常な興奮ぶりに首をかしげる博士に対し、アルキメデスは人造人間に何らかの性的な力の萌芽がいまだ残っていると指摘する（vgl. ebd.）。それによると一般的にホムンクス^{セックス}を特徴づける身体的な未発達、つまりこの小説では制限された男性性^{セックス}が、女性ホムンクリーデン製造案により、人間の性の漸次的発達とは異なり急激に発達しているのである。ここで注意すべきは、女性が存在してこそ男性が存在するという自明ではあるが忘れられがちな両性の存在論的依存関係である。つまりホムンクスがより完璧に近い人間男性として存在するには、女性ホムンクスが必要なのである。これは女性の非存在により男性がより完全な人間に高められるというヴァイニンガーの主張と正反対の主張でもある。

作中では男性性^{セックス}の突然の発達と共に、ホムンクリーデンの精神性もまた急速に発展する様子が以下の様に描写される。

女性ホムンクリーデンを創るというロレンツの提議が全てのホムンクリーデンをひどく刺激した。潜在的な感情が彼らの中で目覚めた。彼らの感情のない心は全く特異に、切なく、ロマンチックに動いた。（342）

人間らしい感情が欠落していたホムンクリーデンも男性性^{セックス}の目覚めによって、人間の心を初めて獲得するのである。この精神性の獲得はまた「ホムンクリーデンにおいて彼らの身体の独自の構造によりどのような愛欲も抑圧できる」（343）とする科学の仮定が間違いであったことをも証明した。

さらに女性の存在可能性により人造人間の愛欲だけでなく彼らの文化もまた発展の兆しを見せる。女性ホムンクリーデン製造案が人造人間社会に知れ渡ると、突然ホムンクリーデンの新聞に詩が掲載される（vgl. 341）。それまで詩を創作するホムンクリーデンはいなかったのだから、これは女性を原動力とした人造人間の創造性や文化の進歩であると言える。また人造人間の間では女性ホムンクリーデンにより人造人間の芸術と生活が促進されることや、一人の潜在的に男性であるホムンクリーデンにつき一人の女性のホムンクリーデンが付与されることが期待されている

(vgl. 340 f.)。この期待は帝国内に現在の文化や生活に不満を抱く者がでてきたことを意味する。彼らは「ホムンクリーデンの高い文化は十分に何の苦勞もさせないが幸福にもしない」(352)と述べ、女性ホムンクリーデンこそ「ホムンクリーデンを幸福にするための非常に確かな手段」(ebd.)だと主張するのである。

第二に、ホムンクリーデンは現世で幸福を感じないというヴァイニンガーが指摘する男性の性格を示す。『性と性格』において「幸福なのは女性だけだ。男性は幸福を感じない」⁽³⁶⁾とされる。男性が幸福を感じない理由としてヴァイニンガーは、不死の理想の為に男性は現世での満足、即ち幸福な感情を得られないのだとする⁽³⁷⁾。同様にホムンクリーデンも幸福を感じない。確かにホムンクリーデン社会は現代社会が抱える様々な問題、例えば貧困、病気、戦争等から解放されている。なぜなら彼らはこうした諸悪の根源とされる女性を社会から排除したからである。故に彼らは幸福であるはずである。しかし一方で彼らは人間らしい感情が欠落した、ロレンツ曰く「自動機械」(145 u.a.)である為、幸福を感じることはない。故にホムンクリーデンは、幸福を感じないというヴァイニンガーが唱える男性の典型的な性格を否定的な意味合いで踏襲していると言える。

第三に、ヴァイニンガーが身をもって示した男性的性格である暴力をホムンクリーデンは行使する。ヴァイニンガー研究者シュトプチュックは男性たちの一般的な矛盾を以下の様に指摘する。「理性と精神のあらゆる彼ら[男性たち 徳永]の言語的な賛美にも関わらず、彼らにとって政治的な議論において最終的に物理的な暴力の方が合理的な主張よりも意味を持つ。」⁽³⁸⁾同様の矛盾をホムンクリーデンにおいても指摘することができる。即ち人造人間帝国政府は女性人造人間の製造に関する問題を、博士とロレンツとの交渉により解決するのではなく、物理的暴力、即ち二人の乗った電気飛行船の電源供給を停止させ、二人を殺害することによって解決しようとする。動力を失った飛行船は海面に墜落・大破し、二人に同行した人造人間—その中にはプラトンとアルキメデスもいる—は全員溺死し、ロレンツは大けがをする。このような暴力行為は理性的で平和主義者とされるそれまでの人造人間の描写と対照的である。さらに注目すべきはここでホムンクリーデンの暴力が「女性から生まれた者たち」のみならず、主人公たちの亡命を援助することで人間らしさを見せる同胞にも向けられている点である。ホムンクルスの帝国において、人間らしい感情や良心を備えたこうした一部のホムンクリーデンには「構造上の欠陥」(204 u.a.)があると見なされている。こうした「構造上の欠陥」のある人造人間は通常、修理或いは安楽死によりホムンクリーデン社会から排除される (vgl. 204)。異分子に対する非情なまでの厳格さはヴァ

(36) Ebd., S. 381 f.

(37) Vgl. ebd.

(38) Ebd., S. 655.

イニンガーの自殺にも見られる。ヴァイニンガー研究者カラッソはスキャンダルとして報道され耳目を集めた彼の自殺の動機を以下の様に推測する。

彼の自殺の諸理由は遺稿として出版された明白な断章『終局的なことについて』から予感される。彼の本『性と性格』徳永に、その真実でなければならないという熱狂的な要求を出したヴァイニンガーは、一層明確に彼の構造が大いなる失敗であったということに気づいた—そしてとりわけ人間オットー・ヴァイニンガーがああ彼によって表象された純潔なそして完全に意識的な主体ではなく、ますます犯罪者、即ち女性という反対像に似ているということに気づいた。⁽³⁹⁾

引用中の『終局的なことについて』とはヴァイニンガーの遺稿集のことであるが、ここでカラッソは特にこの遺稿集の中の「最後のアフォリズム」に着目していると思われる。なぜなら1903年9月29日にヴァイニンガーは旅行を終え、ウィーンの父の家に戻り「最後のアフォリズム」を執筆したのだが、この時彼は恐らく確固たる自殺の意図を持っていただろうと推測される。そして10月3日、彼は父の家を出てベートーヴェンの終の棲家の一室を借り、翌日の早朝拳銃で胸を撃った⁽⁴⁰⁾。つまり自殺直前に書かれた「最後のアフォリズム」の内容から彼の自殺の動機が窺えるのである。先に引用したカラッソの推測によればヴァイニンガーの自殺の動機とは、彼自身の男性性が、『性と性格』の中で主張した彼の理想である絶対的な男性のそれと一致せず、むしろ「彼の構造」が同著の中で彼がその存在を否定した女性性に類似していることに彼が気付いた点にあった。しかしながら「最後のアフォリズム」を読む限り、彼が自身の中に『性と性格』において彼が述べた女性性との類似に気付いたという明示的な記述は見られない。ではどの様にしてカラッソはこのテキストから上述の動機を導いたのだろうか。このアフォリズムに繰り返し登場するのは、カラッソも述べている「犯罪者」である。この犯罪者とはしかしながら一般的な意味でのそれではない。ヴァイニンガーによると、「犯罪（殺人）とは他人（神）に罪を与えようとすることを用いること⁽⁴¹⁾」であり、「犯罪者は神を殺そうとする」⁽⁴²⁾とある。ここから犯罪者というのは反キリスト者、悪魔のような存在であると理解できる。また同アフォリズムの別の箇所には「ユダヤ的なものとは、他のもの（キリスト教的なもの）に罪を与える [中略] ことだ！罪の転

(39) Calasso, Roberto: Der Philosoph und die „Kokotte“. Aus dem Italienischen übersetzt von Vincenzo Orlando. In: Weininger 1980, S. 662-667, S. 664 f.

(40) Vgl. ヴァイニンガー 1980, 402頁; Weininger, Otto: Über die letzten Dinge. Mit einem biographischen Vorwort von Moritz Rappaport. Wien; Leipzig (Braumüller) 1904, S. XIX f.

(41) Weininger 1904, S. 182.

(42) Ebd., S. 176.

化とはユダヤ的なものことだ」⁽⁴³⁾とある。このことから犯罪者というのは彼の言うところのユダヤ的な性格を持った人間であると言える。ここにユダヤ人ヴァイニングアの自己憎悪を読み取ることもできるだろう。だが、『性と性格』のもう一つの主題である男女の性との関連が指摘されるのは彼による犯罪者の別の定義である。「犯罪者は聖人の様に性的不能である。彼は精神的に性的であるにすぎない、彼は男女の取り持ちをする。」⁽⁴⁴⁾この記述から犯罪者は性交を行う能力はないが性的な精神を持つ者を指すとわかる。さらに犯罪者は男女の間を取り持つことから、ヴァイニングアが『性と性格』で述べた女性的な性格の持ち主でもある⁽⁴⁵⁾。この犯罪者の性格についてヴァイニングアはさらに以下の様に詳述する。

〔前略〕犯罪者はまた女性を考えとして仮定する（彼は性交を欲する）。しかし女性は彼の為に存在しない。彼は彼の探す女性を決して見つけない。なぜなら彼は女性に関する考えだけを作るからである。彼は完全な娼婦（年老いた女性）に性的欲望を抱くことができる。そして（彼が潔癖になろうと欲するなら）彼は聖母を愛することができる。しかし彼は彼が健全な時に聖母を見つけるのであり、この瞬間彼は聖母を作るのである。⁽⁴⁶⁾

ここから読み取れるのは、犯罪者は娼婦だろうと聖母だろうとともかく女性を求めるという点である。娼婦を求める時彼は性欲を抱き、聖母を求める時彼には聖母に対する愛情がある。しかしこの娼婦や聖母は現実には存在せず、彼の思考の中だけに存在する。ここでは一見するとヴァイニングアは犯罪者の性欲や愛欲を断罪している様に見える。しかし『性と性格』と「最後のアフォリズム」を比較すると、『性と性格』の中で女性を娼婦と母親という単純なカテゴリーに分類したヴァイニングアと、「最後のアフォリズム」で女性を娼婦或いは聖母のどちらかとしてしか考えることのできない犯罪者とが似ていることに気付く。しかしこの類似は自己矛盾である。なぜなら両者が同一人物だとすれば、『性と性格』の中で女性の性格であると述べた男女の仲介をしたがる性格や、理想の男性にはない性欲という女性的なものがヴァイニングアにあるということになってしまうからだ。この自己矛盾を認めることは『性と性格』の中であれほど熱烈に理想的な男性像を説き、あれほど徹底的に女性を貶めた著者ヴァイニングアにとって耐え難かったであろう。この犯罪者がユダヤ的なものと等しいとすればなおさらである。故にカラッソは前述の引用の中でヴァイニングアが犯罪者としての自己認識と『性と性格』との矛盾に気付いたことが彼の自殺の動機であろうと指摘するのである。

(43) Ebd., S. 183.

(44) Ebd., S. 180.

(45) Vgl. Weininger 1980, S. 344-352.

(46) Weininger 1904, S. 180 f.

だが「最後のアフォリズム」の次の箇所を読むと、彼の自殺の動機についてカラッソとは別の考え方も可能である。「完全な犯罪者は自殺に失敗するに違いない、なぜなら彼は復讐し害する為に生きようとするのだから。」⁽⁴⁷⁾ ヴァイニングが自己の中に犯罪者のな性格を認めながらも、完全な犯罪者にならない為に考え出した究極の解決策が自殺である。つまり彼は完全な自己矛盾に陥り絶望して自殺したのではなく、『性と性格』で挙げた男女の様々な二項対立を上回る新たな究極の二項対立、即ち自殺に成功する人間＝非犯罪者＝男性的なものと自殺に失敗する人間＝犯罪者＝非男性的なものを作り出すことでこの自己矛盾を解消しようとしたのである。ヴァイニングは『性と性格』で男性のみが死後も生存すると主張していたのだから⁽⁴⁸⁾、自殺とは彼にとり彼の中の女性的なもの、ユダヤ的なもの—要するに彼にとってその存在が許せないもの全て—のみを殺害することを意味する。彼が男性だけの性格であるとする天才の一人、バートーヴェンゆかりの地をわざわざ自殺する場所に選んだのは、『性と性格』の著者である彼が自身の男性性、ひいては自説の正しさを強調しつつ自殺することを望んだからだろう。

ホムンクリーデンを生物学的に人類同様、類と見なすならば、ホムンクリーデンによる「構造上の欠陥」のある同胞の排除（殺害）はある意味、類自体の自己破壊であると言える。さらに女性人造人間の賛否を巡る意見の対立の中で帝国は一気に市民戦争に突入しつつあり（vgl. 344）、これを類内部の葛藤や矛盾と捉えることもできる。自殺によって彼の中の女性的なものを抹殺しつつ理想の男性性を目指したヴァイニングと、非正規の人造人間や自分と異なる考え方を持つ同胞を殺害するホムンクリーデンは、それらの理想或いは規格の極端な厳格さ、そしてそうした理想や規格に適合しない自身の外部そして内部の異分子の存在—こうした異分子を排除する為なら現世での他者の生もまた自らの生でさえ奪われて然るべきだと彼らは考える—や自己矛盾への絶対的な不寛容さと冷酷さ、暴力の点で一致するのである。

人造人間の自己破壊にハーヴェルが対置させるのが、「女性から生まれた者たち」の住むアイスランドに命からがらたどり着いたフォラウスとロレンツの幸福な余生である。小説は以下の様に締め括られる。

フォラウス博士は人間とホムンクリーデンに付き纏う運命により尚彼に定められた時間を、彼の自伝を書くために使うだろう。その中でホムンクリーデンは取り立ててよい地位を占めないだろう。／ロレンツは彼の2040歳という年齢に関わらずいまだに若者だと感じる。彼は結婚するだろう。フォラウス博士は彼の家族の中で善良な小父^{おじ}の役を演じるだろう。（364 f.）

(47) Ebd., S. 181.

(48) Vgl. Weininger 1980, S. 380 f.

ここで話題となるのは未来における博士の自伝執筆とその中での人造人間の否定的評価、ロレンツの結婚と彼の家庭、そしてその中で小父^{おじ}としての役割を果たすフォラウスである。この結末によってハーヴェルは、結局のところ十九世紀の市民的・家父長的な家族・家庭観を読者に教訓的に示したにすぎないのだと性急に結論付けられるかもしれない。しかしながら、上述の結末は性役割の決定に際し重要なロレンツと彼の結婚相手との間の子供について具体的な言及を避けている。人造人間の帝国でロレンツが女性ホームクリーデンとの結婚生活における子作りを重要視していないことも (vgl. 320)、ロレンツの子供の有無に関する読者の推測を難しくしている。その為博士以外の家庭内の性役割は不明なままである。また親族関係にない中年の男性としてフォラウスがロレンツの家庭内で演じるとされる善良な役割に関しても様々な解釈の余地がある。ロレンツの子供に関する沈黙や家庭内の性役割に関する結末の曖昧さは、十九世紀の家父長的な家族・家庭観にも、人工生殖から自然生殖への回帰というSFの典型的な筋の図式にも束縛されることなく、ロレンツと彼の結婚相手との未来の家庭を各人が思い描くことのできる自由な読みの余地を生む。この様々な解釈へと開かれた結末の構造によってこそ、現代から一世紀以上も前に書かれた本作は今なお現実味^{アクトチュアリティ}を持つ。なぜなら様々な家族や家庭のあり方が容認され、科学技術により人間の性^{セックス}そのものが変更可能となりつつある現代にあっては、パートナーや結婚、家庭、人生といったものに何を求めるのかという読者の価値観も多様でありうるからだ。故にこの結末は各々の価値観に従って物語に意味を見いだそうとするどのような現代読者をも拒むことがないのである。

結 論

『ホームクリーデンの帝国で』の特徴は以下の二点に要約される。第一に、本小説は人工生殖により成り立つ社会^{ディストピア}を暗黒郷として描いた。それにより本作は人工生殖による暗黒郷^{ディストピア}を扱った二十世紀のその他のSF小説、例えばザミャチンの『われら』(1924)やハクスリーの『すばらしい新世界』(1932)等と問題意識を共有し、それを先取りすることとなった。このハーヴェルの先見性は評価できるだろう。たとえ人工生殖を題材とした暗黒郷^{ディストピア}の典型によって、この小説が現代のSF読者の眼には多かれ少なかれ陳腐に映るにせよ。

第二に、ハーヴェルの小説は人工生殖から自然生殖への回帰—これは主人公たちの人造人間の帝国から北方の人間社会への空間的な移動により明確に表現される—を文化や文明の豊かな発展の可能性という観点からは是としているが、個人の自由や幸福という観点からは必ずしも是としていない。つまりこの小説は人工生殖の社会^{ディストピア}=暗黒郷(誤)と自然生殖の社会^{ユートピア}=理想郷(正)という二項対立に基づき、前者から後者への回帰を肯定していると解釈する必要はない。なぜなら結末に見る様に主人公とその結婚相手が自然生殖を選択するかどうか定かではないから、つまり自然生殖に主人公の幸福があるとは限らず、主人公とそのパートナーに選択の自由があるからである。ここでは確かに社会や文化における女性の意義や重要性、つまりジェンダーとしての女性が

強調されるのだが、一方で産む性としての女性、即ちセックスとしての女性の意義や重要性に関する主張は曖昧である。ハーヴェルがこのような結末を書いた背景には、自然生殖が行われる社会でも全体の発展を過度に優先するあまり生殖が統制・制御されると個人の自由や幸福が蔑にされるのではないか、という懸念があったと考えられる。こうした懸念は現代フェミニズムSF小説、例えばマーガレット・アトウッドの『侍女の物語』（1985）でのそれと共通している。アトウッドの描く生殖に科学技術がほぼ介入しない社会も、ハーヴェルの描く生殖が科学技術に全面的に依存した人造人間社会も、個人を国家や社会といった全体の発展の為の道具と見なす点では同じである。個人が全体に盲目的に奉仕することの危険性は歴史、とりわけナチス・ドイツが証明している。『ホムンクリーデンの帝国で』はヴァイニングーのような硬直的な二元論に陥ることなく、人間社会の文化的発展と個人の自由や幸福の両立を柔軟に思考した。そこにこの小説を、一方では科学技術による生命創造が現実のものとなりつつあり、他方では国家権力による自然生殖への介入が存続し続ける現代において、読む意義がある。